

谷崎潤一郎のデビューとアナトール・フランス

—「麒麟」をめぐる諸問題—

篠塚真木

明治末期に日本に移入された外国作家のうち、フランス作家、アナトール・フランスの例は、とりわけ注目に価するものであった。

この作家をはじめて日本に紹介した人物と推定されるのは、処女作「シルヴェストル・ボナールの罪」(一八八一)の英訳者であり、明治二九年(一八九六)から明治三五年(一九〇二)まで、松江中学を経て東大で英文学を講じたラファディオ・ヘルンであるが、日本人としてその役割をになったのは、明治二九年以来、主に「帝国文学」に拠ってアナトール・フランスを紹介しつつ、自らも次第にその理解を深めていった上田敏であった。彼の紹介は、当時のヨーロッパ文壇の動向を知らせる、といった単なる新しい文物の報告から徐々に深まって、同じ都会人という氣質の一致から来る深い共感を示すまでに至っている。

明治四十一年のはじめ、折からアメリカを経て私費留学の途にあった三十三才の上田敏は、パリのマダム・ド・カイヤヴェのサロンで六十四才のアナトール・フランスと面会し、その感激を鷗外に書き送った。その書簡はそのまゝ、「巴里より」として同年五月の「歌舞伎」に掲載され、帰朝後の敏は、前にもまして積極的にアナトール・フランスの紹介を行うことになる。

しかし、このときはまだ、このフランス作家の作品そのものは日本の読者の前に姿を現わしてはいない。そして、アナトール・フランスの爆発的な流行が起るのは、その英訳本の移入を直接的な契機とするものであった。

明治四十一年十二月十八日の丸善株式会社刊「学鑑」は、

France, Anatole — Thais. Translated by Ernest Tristan, London, Greening & Co. 1902

(Lotus Library)

の入荷を告げている。

これは小さな紫色の表紙の抄訳叢書で、当時しきりに読まれたポケット・ブックの一冊であるが、この「タイス」が、恐らくは最初に日本に入ったアナトール・フランスの英訳であり、それが四十二年正月の「早稲田文学」で紹介されるや、テーマの斬新さとも相まって大きな反響をまきおこした。丁度そこへ、今度はロンドンのジョン・レイン社の企画した大がかりなアナトール・フランス作品集の第一陣四冊^③が入荷し、以後、ロンドンの出版を待つて直ちに繰返して輸入されたこれらの英訳本が、決定的なブームを形づくることとなる。そして爆発的な流行を示した明治四十二年には、英訳からの重訳による翻訳、およびその紹介は新聞、雑誌にあふれ、この年だけでも二十を越える。翌四十三年もこの傾向は衰えるどころかますます盛に続けられ、二月には三教書院から若月紫蘭訳「アナトール・フランス短篇傑作集^④」という単行本が発刊されるまでに至ったのである。

この流行は、たしかに直接的には上田敏の紹介をプレリユードとする英訳本の大量流入からひきおこされたものである。また、その最初に知らされたものが、古代エジプトを舞台としたドラマチックな構成と着想の新鮮さをもった「タイス」であった、という偶然性も大きい。しかしここで私たちは、そのブームのにない手となった日本文壇について検討して見る必要がある。

アナトール・フランスの英訳がはじめて日本に紹介された明治四十一年—四十二年という時点は、すでに「破戒」(明治三九)、「蒲団」(明治四〇)を経た自然主義文学の時代であった。そして、その頃のアナトール・フランスの読

者には、きわめて反自然主義的な意識が強い。前述の上田敏のアナトール・フランス面会報告の手紙に対して鷗外は、「当方所謂文壇の批評は国木田、田山の外に作者はないかのやうな偏頗になって、漱石といふ声すら今日は殆ど聞えません。例えば Anat. France のやうな作でも出たら一應大陳腐として斥けらるゝでせう」と皮肉な口吻で答えているし、またこの流行が一応落着いた大正三年に、水野和一訳「タイス」の序文を書いた上田敏は、「アナトール・フランスの作がわが文壇に紹介されるとは不思議だ……若し一部評壇の声に少しでも相当の根拠があるならば、原著者の如きは、今の日本文壇に最も不人望なる作家として閑却し排斥すべき人であるからである」と、これまた皮肉たつぷりに書いている。彼にいわせれば、「典雅の趣味、格調を煙たく思つて乱雑、無検束、拙速等に安んずるわが文壇の一部は直ちにこの『文章が旨過ぎる』人を軽蔑すべき筈」なのであり、フランスが繰返して「享楽主義」を述べているのは咎められるべきこと、また、フランスの政治に介入する態度は「功利的、實際的、表面的、常識的」と非難されてしかるべきだといふのである。裏を返せば、これはすべて日頃の自然主義文学横行へのうっぷんを晴らしているのであり、この「タイス」推薦の辞は、ここでははつきりと自然主義文学攻撃の弁として読みとることができる。

明治四十二年五月「アカ子」所載の広瀬青波の紹介記事「アナトール・フランス」の結びの數行は、フランス移入初期の文壇の空気を鋭敏に伝えている。

……自然派文学が日本の文壇を風靡して居る昨今こんな作家が迎へらるやうになつたのは現代日本文学の傾向を
変らせる動機となり聽て自然主義の没落を誘はうとするのであるかも知れぬ。文芸革新会があんな拙い宣言をし
て自然派を攻撃するよりか此アナトール・フランスでも大いに賞揚したら餘程有功だらう何となれば自然派文士
の連中の某々等は最早アナトール・フランスを振舞さうとしてをるではないか。併し革新会の人達はそんな策を
弄するには餘り堂々たる大家であり過ぎるかも知れぬ。

ここで引合いに出されている「文芸革新会」とは、この年の三月、宙外後藤寅之助の編集する雑誌「新小説」に、

「我が国現時の一般思想界及び文芸界程甚しく混乱を極め、紊乱を極めている時代も少なからう。宛然まるで徑なき大森林の闇に灯火を失った姿だ。蕩天の波に漂ふ舵なき船とも云ふべき有様である（中略）そこで平生思想の傾向を同じうし、趣味の共通点多き者十数名相会して、この紊乱の間に進むべき一条の活路を開かんとするのである。（中略）迷へる者を攪醒する我等同志の叫びを聞け⁸」という宙外の前書きと共に、連名で次のような声明を発表した自然主義文壇への不満をいやく面々、林田春湖、登張竹風、小山鼎浦、中島孤島、栗原古城、後藤宙外、姉崎嘲風、齊藤野の人、佐々醒雪、笹川臨風、樋口龍峽、によって起されたものである。

主張

惟ふに現代の日本は高遠雄大なる理想が新たなる文明の下に將に実現せられんとする途上にあり。従って吾人の文芸は光明ある新時代の精神を基礎として人世の爲めにせる文芸ならざるべからず。現代英雄的日本の要求は剛健なる思想と清新なる趣味との鼓吹にあり。至醇なる新思想の建設にあり。生命ある新技巧の發揮にあり。眞摯なる人世の新価値を認むるにあり。文芸革新の機運は今や方に熟せるに庶幾し、吾人同志の士は時代の要求に應じ、此機運に乗じて、沈滞する局面の転回に一臂の力を効いたさんことを期す⁹。

發起人に樗牛会のメンバーが目立つことが注目せられる¹⁰。この樗牛流の日本主義が基底となった自然主義文学反対の動きは、いささかアナクロニズムのように感じられる。そして、この人々の要求している文学は、アナトール・フランスとはまるで異質のものである。ところが、自然主義文学のあとをうけたものはこういった文学ではなく、むしろアナトール・フランス的理智の感じられる近代文学だったのだから、広瀬青波の皮肉な示唆は、結果において当てていたといえる。

そしてその翌月、この記事の評して、「文章世界」には当時としては極めて珍しい、アンチ・アナトール・フランスの記事が掲げられる。筆者はこの雑誌の編集者、花袋田山録弥であろうか。

……この文に依って見ると、今の日本文壇には「アナトル・フランス」が大ぶ流行してゐるやうであるが、果してさうであらうか。少くとも、自然派と目されてゐる人がそんなに珍重してゐるであらうか。疑はしくはなからうか。唯だ所謂流行に後れざらんとして、読まずに書架を飾る読書子や、西人の批評を抄訳して、それで新智識を誇る評論家やの間に持て囃されたゞけではなからうか。⁽¹¹⁾

「こんな作家が迎へられるやうになつたのは現代日本文学の傾向を交らせる動機となり聽て自然主義の没落を誘はうとするのであるかも知れぬ」という青波の不吉な予言にあわてた風もみえるが、花袋の著、「東京の三十年」、「近代の小説」を讀んでも、フランスへの共感は認められない。フランスは、彼が常に「隠然一敵国」⁽¹²⁾と意識していた上田敏のものであつた。そしてこのあたりから、最初は自然派の相馬御風などもいちやく翻譯を發表していたアナトル・フランスは、はっきりと反自然主義陣營のものとなつてくるようである。⁽¹³⁾

アナトル・フランス支持が自然主義文学へのアンチ・テーゼとなつたことこの理由には勿論フランスその人の反自然主義の態度が根底となつてゐるのであるが、それと同時に、フランスの文体、作風といった点も見のがせない。文の美しさは敏も反自然主義的なものとして指摘してゐるが、フランスの作品の極めて都会的な要素も大きく作用してゐるのである。

乱暴な定義を敢えてすれば、自然主義文学は、紅葉、露伴、一葉、漱石などの都会人の文学への反逆の姿としてとらえられる。一方、反自然主義作家の側から見れば、「自然主義の作家連を田舎者の集団と認め」⁽¹⁴⁾「彼等の無趣味無感覚に対する反感」⁽¹⁴⁾を抱いていた谷崎潤一郎の意識は彼らに共通だったのであるまいか。

パリ中央セーヌ河畔のマラケ河岸に生れ、自分の生れた地を「この優雅と栄光の地」(cette région d'élégance et de gloire)と誇つたこの生粋のパリジャンを愛した日本の作家が、多く東京の生れであることは注目に価する。上田敏、芥川龍之介、更には永井荷風、谷崎潤一郎、彼等のアナトル・フランスへの共感には、意識的にせよ無意識的にせよ、たしかに「都会人」としてのつながりが認められる。

一方、昭和二年になって、森田草平は、久しく名を耳にしながら今までフランスの作品を読まなかった理由をこう告白している。

……それは、勿論、彼がオルソドックスの教会に反抗するやうな態度を取ってゐるからではない、又彼の皮肉や諷刺に恐れをなした訳でもない。それよりも、ただ彼が生粋の巴里人であるところに恐れをなしたのである。つまり彼自身と云ふよりは、彼の好きな日本人に恐れをなして、到底自分のやうな田舎漢のお齒には合はない——さう極めてかかったやうなプレヂュデイスの下に、今日までは彼に近寄らなかつた。

表面の華やかなアナトール・フランス流行の背後には、たしかにこういう一グループも存在したのである。そして又、反対に、当時の反自然主義の作家たちが尊重したものであったため、アナトール・フランスの姿は実際以上に大きく浮び上がったものであったのかも知れない。日本に導入されたアナトール・フランスを考える場合、単なる英訳本の流布、目先の変わった物珍らしさだけでなく、この政治的背景と、それに附随して形成された読者層の内容を忘れてはならない。

自然主義の論争のさなかの日本文壇に移入されたアナトール・フランスが、自然主義文学からの活路を求めていた反自然主義陣営に迎えられた現象は、日本国内の文壇論争に一つの刺激を与えた、乃至は文壇論争に政治的に利用された、外国文学の一例としてとらえてよいのではあるまいか。

ではこうした“政治的”な背景のもとに、自然主義文学のアンチ・テーゼとしてとらえられ、うけ入れられたフランス作家、アナトール・フランスの作品は、実際に、反自然主義の文学作品の上に影を落しはしなかつたろうか。自然主義文学に不満をいだいていた作家たちは、ここに積極的になにものかを求めなかつたろうか。私はその最も早い一つの例を、谷崎潤一郎の出世作、「麒麟」に見出すのである。

「麒麟」は明治四十三年（一九一〇）十二月の第二次「新思潮」第四号に発表された。谷崎は二十五才、この年の九月には東大を退学し、十一月には「刺青」を発表している。そして、作家として立つ決心を固めた彼に作家的名声を与えたのはこの二つの作品であった。翌明治四十四年十一月の「三田文学」に永井荷風は「谷崎潤一郎氏の作品」と題して長文の批評をかかげ、「明治現代の文壇に於て今日まで誰一人手を下すことの出来なかった、或は手下さうともしなかった芸術の一方面を開拓した成功者⁽¹⁶⁾」と、谷崎を絶賛し、自然主義文学の未だ衰えをみせぬ文壇に、一躍この青年を送り出したのであった。これを読んだ谷崎は、体中がぶるぶるふるえて、読んでしまってもまだふるえが止まらなかった程の感動を受けたと繰返し追憶している⁽¹⁷⁾。

この出世作、「麒麟」の新しいさは、一体どこにあったのだろうか。荷風は、「刺青」の「其れはまだ人々が『愚』と云ふ貴い徳を持つて居て、世の中が今のやうに激しく軋み合はない時分であつた。……」という書き出しをほめたあとで、「谷崎氏は小説『麒麟』の書き出しに於ても亦同じような一種独特の筆法を以て、先づ氏が語らうとする物語の気分をば、簡短なる数行の文章によって巧みに此れを作り出してゐる⁽¹⁸⁾」とのべ、更に、谷崎の作品の特色として、一、肉体的恐怖から生ずる神秘幽玄、二、全く都会的たる事、三、文章の完全なる事、を挙げている。また、日夏耿之介は、「『麒麟』の文体」（「谷崎文学」所収）で、「谷崎が若くしてこの論語よりのリトオールド物を企てた時、その文章は大いに新しかった⁽¹⁹⁾」と云い、その新しいさの説明として、「当時、漢学先生の漢学が、モラルやカスタムの上許りでなく、文体や感情空想生活の上にも重くおしかゝつて、さてこそ青年は漢学をきらひ、これに反抗の気味合で本元の漢唐儒学にも明清小説にも白い歯を見せてゐたのであるが、谷崎君が肯へてそれを拾ひ上げたのはひとつの卓見にちがひはなく、又その文体が漢学畑より採つて全く漢学臭を脱したものをも所有してゐたのがよかつた……要す

るに、『麒麟』はそのなかの新文章で持つてゐる好篇であつた。²⁰と、文章の新しさを強調している。

しかし、この「新文章」は、果してすべて谷崎の独創であつたらうか。「論語」、「史記」など漢典の記述を豊富に使つたこの短篇を読むとき、私はそこにアナトール・フランスの影を感じずにはいられない。「麒麟」の書き出しを評して、「自分は殊にこの『麒麟』の文章を以て、優にアナトール・フランスの『タイス』や『バルブ・ブリウ』の書き出しにも比較し得るものと信ずる」と²¹といった荷風は、つとにこれを感じとつていたのであるまいか。「麒麟」を読むとき、特にその冒頭部と終結部とを読むとき、私は、ここに荷風の挙げていない他のフランスの作品、「バルタザアル」の文章を思い出さずにはいられないのである。「バルタザアル」はアナトール・フランスの最初の歴史小説であり、そのスタイルは聖書の記述の如く簡潔である。以下に、この二つの作品の冒頭部、終結部を、それぞれ並べて引用してみよう。

〔冒頭部〕

「麒麟」

鳳兮。鳳兮。何徳之衰。

往者不可諫。來者猶可追。已而。已而。今之從政者殆而。

西曆紀元前四百九十三年。左丘明、孟軻、司馬遷等の記録によれば、魯の定公が十三年目の郊の祭を行はれた春の始め、孔子は數人の弟子達を車の左右に従へて、其の故郷の魯の國から傳道の途に上つた。

泗水の河の畔には、芳草が青々と芽ぐみ、防山、尼丘、五峯の頂の雪は溶けても、砂漠の砂を擱むで來る匈奴のやうな北風は、いまだに烈しい冬の名残を吹き送つた。元氣の好い子路は紫の貂の裘を翻して、一行の先頭に進んだ。考深い眼つきをした顔淵、篤實らしい風采の曾參が、麻の履を穿いて其の後に續いた。正直者の御者の樊

遅は、駟馬の銜を執りながら、時々車上の夫子が老顔を窺み視て、傷ましい放浪の師の身の上に涙を流した。²²⁾

「バルタザアル」

東邦は方術を知れる

ものをおほむね王となせり。

ティルトウリアアヌス。

その頃、エチオピアは希臘人がサラサンと呼んだバルタザアルが統治していた。彼は黒くはあつたが美しい顔立であつた。彼は單純な精神と、寛大な心とを持っていた。統治の三年目、年二十二才のとき、彼はサバの女王バルキス訪問の途に上つた。陰陽博士サンボビチスと宦官マンケラとがこれに隨行した。王に従つたのは七十五頭の駱駝で、肉桂、没藥、砂金、象牙を積んでいた。旅の道すがら、サンボビチスは、王に星の力や石の力を教え、マンケラは、禮拜の歌を歌ってきかせた。しかし、王はこれらを聞こうとはせず、砂漠の地平線にみえる、耳を立てて坐っている小さなシャカルを見て楽しんでいたのであつた。²³⁾

〔終結部〕

翌くる日の朝、孔子の一行は、曹の國をさして再び傳道の途に上つた。

「吾未見好徳如好色者也。」
われいまだとくをこのむこといろをこのむがごとくなるものをみざるなり

これが衛の國を去る時の、聖人の最後の言葉であつた。此の言葉は、彼の貴い論語と云ふ書物に載せられて、今日迄傳はつて居る。²⁴⁾

そして、家に入り、幼な児がその母マリアと偲にいますのを見て、彼等はひれ伏してそれを拜した。そして自

分たちの寶をひろげて、福音書の中に書かれているように、黄金、乳香、没薬を幼な兒に捧げたのであった。⁽²⁵⁾

谷崎の文の背景には、論語や史記などの漢典があるし、用語、文章にも谷崎特有のものがある。しかし、この簡潔に短いパラグラフで物語の場を説定する手法は、アナトール・フランスなどから学んだものではなかったろうか。

「西暦紀元前四百九十三年。と書きだしたのも当時は新しく」⁽²⁶⁾と日夏耿之介はいう。けれどもこれは、「バルタザアル」の「統治の三年目、年二十二才のとき、彼はサバの女王バルキス訪問の途に上った。」と、どこか似ている。王バルタザアルに従った陰陽博士サンボピチス、宦官のマンケラ等の描写は、子路、顔淵、曾參等の「論語」に登場する孔子の弟子たちに置きかえられる。そういえば、荷風のほめた「刺青」の冒頭部、「其れはまだ人々が『愚』と云ふ貴い徳を持つて居て、世の中が今のやうに激しく軋み合はない時分であつた。」も、この「バルタザアル」の書き出しの「その頃、エチオピアは、希臘人がサラサンと呼んだバルタザアルが統治していた」。や、「タイス」の冒頭、「その頃、砂漠には大勢の隠者たちが住んでいた」のスタイルと似ている。また、論語微子篇、或は史記孔子世家篇からとった「鳳兮鳳兮……」のエピグラフの手法も、当時は新しいものだったと思われるが、「バルタザアル」にも、短いらテン語のエピグラフがついている。フランスの短篇にラテン語のエピグラフならば、日本の短篇には漢文のエピグラフがふさわしい。結尾部の簡潔な記述を見ても、「バルタザアル」が「福音書の中に書かれているように」と軽く結末を福音書の記事と結びつけているのと同じく、「麒麟」では「此の言葉は、彼の貴い論語と云ふ書物に載せられて、今日迄傳はつて居る。」と結んで、西洋のモラルの規範たる「福音書」を、東洋のモラルの規範であった「論語」に置きかえている。本の中からぬけ出して、読者を一旦は生き生きと動く世界にいざなつた案内者は、まだ物語のクライマックスの興奮からさめやらぬ読者をおきざりにして、急に動かぬ本の中へ魔法使のように姿を消す。現代でも映画などでよく用いられるこの手法は、いわば軽妙な肩すかしの法ともいおうか、物語の余韻を巧みに処理するアナトール・フランス常套の手段である。⁽²⁷⁾これを単なる偶然の一致とみるならば、谷崎はあまりにもアナトール・フランスと似た作風の作家であるといわねばなるまい。

こうした冒頭部、結尾部の類似だけではなく、その中間の部分をも、目立つ類似はある。衛の靈公の夫人、南子と、シバの女王バルキスとの類似がそれである。「麒麟」の登場人物、物語の骨組は殆ど「論語」、「史記」に書かれた通りであるが、⁽²⁸⁾「妾は世の中の不思議と云ふ者に遇つて見たい。あの悲しい顔をした男が眞の聖人なら、妾にいろいろの不思議を見せてくれるであらう」と、「夢みる如き瞳を上げて」孔子の車を見送る南子夫人の心は、何か見知らぬ危険にあこがれ、恐ろしい目をみたくてたまらぬバルキスの、未知なるものへの激しい欲求と一致するし、「先生が眞の聖人であるならば、三王五帝の古から、妾より美しい女が地上に居たかどうかを、妾に教へては呉れまいか」と「晴れやかに笑いながら」孔子に問う南子夫人は、微笑しながらバルタザアルの前に立って、「王よ、あなたは隣国のカンダス女王を愛していられるとのことですね。正直に言って下さい。その人は私より美しいのですか」と問ひ、その答に満足して「明るい笑」をたてるバルキスに、また、夫靈公が、聖人孔子の言葉を夫人への愛情と置き換えたのを知って激しい怒に唇を燃やす南子が、夫の愛情の衰えたことよりも夫の心の支配力を失ったことに怒るその姿は、学問に身を委ねたバルタザアルがもはや自分を愛していないことを知ったバルキスの、裏切られたような激怒と似ている。美しく嬌慢な彼女たちこそ、以前はその相手を愛していなかったのだ。ただ、バルキスは、今になって、バルタザアルを実は愛していた自分に気づくので、この点で、まことに谷崎的女性像として作り出された南子夫人と異っている。⁽³⁰⁾二人の女性の類似ばかりではない。孔子の言葉を容れて、「夕には靈台に臨んで天文四時の運行を」学ぶ靈公の姿にも、バルキスとの愛に破れた心をいやそうと、毎晩宮殿の靈台に坐して地平線の彼方や月を眺め、陰陽博士と語るバルタザアルの姿が重なってくる。また、孔子が来る前の靈公は、「國原を見晴るかす靈台の欄に近く、雲母の硬屏、瑪瑙の榻を運ばせて、青雲の衣を纏ひ」、「深い霞の底に眠る野山の春を眺めて」、南子や儒者と語るのである。しかも、こうしたことは、殆んどが漢典にはない、作者のフィクションの部分である。

「麒麟」と「バルタザアル」とには、これほど多くの類似点があるが、注意してみると、「麒麟」にはもう一つのアナトール・フランスの作品、「タイス」と似た箇所もある。冒頭部にすぐ続いて、衛の國をさして伝道の旅を続ける孔子の一行が出会う、老人とのエピソードがそれである。

それからまた北へ北へと三日ばかり旅を續けると、ひろびろとした野に、安らかな、屈托のない歌の聲が聞えた。それは鹿の裘に索の帯をしめた老人が、畦路に遺穂を拾ひながら、唄つて居るのであつた。

「由や、お前にはあの歌がどう聞える。」

と、孔子は子路を顧みて訊ねた。

「あの老人の歌からは、先生の歌のやうな哀れな響が聞えません。大空を飛ぶ小鳥のやうな、恣な聲で唄うて居ります。」

「さもあらう。彼こそ古の老子の門弟ぢや。林類と云うて、もはや百歳になるであらうが、あの通り春が來れば畦に出て、何年となく歌を唄うては穂を拾うて居る。誰か彼處へ行つて話をして見るがよい。」

かう云はれて、弟子の一人の子貢は、畑の畔へ走つて行つて老人を迎へ、尋ねて云ふには、

「先生は、さうして歌を唄うては、遺穂を拾つていらつしやるが、何も悔いる所はありませんか。」

しかし、老人は振り向きもせず、餘念もなく遺穂を拾ひながら、一步一步に歌を唄つて止まなかつた。子貢が猶も其の跡を追うて聲をかけると、漸く老人は唄ふことをやめて、子貢の姿をつくんと眺めた後、

「わしに何の悔があらう。」と云つた。

「先生は幼い時に行を勤めず、長じて時を競はず、老いて妻子もなく、漸く死期が近づいて居るのに、何を樂しみに穂を拾つては、歌を唄うておいでなさる。」

すると老人は、からくと笑つて、

「わしの樂しみとするものは、世間の人が皆持つて居て、却つて憂として居る。幼い時に行を勤めず、長じて時を競はず、老いて妻子もなく、漸く死期が近づいて居る。それだから此のやうに樂しんで居る。」

「人は皆長壽を望み、死を悲しむで居るのに、先生はどうして、死を樂しむ事が出來ますか。」

と、子貢は重ねて訊いた。

「死と生とは、一度往つて一度反るのぢや。此處で死ぬのは、彼處で生れるのぢや。わしは、生を求めて齷齪するのは感ぢやと云ふ事を知つて居る。今死ぬるも昔生れたのと變りはないと思つて居る。」

老人は斯く答へて、また歌を唄ひ出した。子貢には言葉の意味が解らなかつたが、戻つて来て其れを師に告げると、

「なかく話せる老人であるが、然し其れはまだ道を得て、至り盡さぬ者と見える。」
と、孔子が云つた。

この一節を読んで先ず念頭に浮ぶのは、論語微子篇（或は史記孔子世家篇）に見られる次の文であろう。

長沮桀溺耦而耕。孔子過之。使子路問津焉。長沮曰。夫執與者爲誰。子路曰。爲二孔丘一。曰。是魯孔丘與。曰。是也。曰。是知津矣。問於桀溺。桀溺曰。子爲誰。曰。爲二仲由一。曰。是魯孔丘之徒與。對曰。然。曰。滔滔者。天下皆是也。而誰以易之。且而與其從三辟人之士二也。豈若從三辟世之士二哉。耄而不輟。子路行以告。夫子憮然曰。鳥獸不可與同群。吾非三斯人之徒與一。而誰與。天下有レ道。丘不三與易一也。

野を耕す二人の隱者の傍を孔子の一行が通りかかり、子路が渡し場をききに行く。二人はいずれも、孔子なら渡し場は知っているだろうとか、今の世では孔子に従うより我々のような隱者に従った方がよからうとか答えて手を休めない。子路が帰つて来てこれを孔子に告げると、孔子は憮然として、天下道なきが故にこそ私はこれをおさめようとするのだのに、というのである。このエピソードは、論語では「麒麟」のエピソードになつて居る「鳳兮鳳兮……」に続いた部分で、同じく孔子が世を救おうとしていることを諷したものである。「麒麟」の老人のエピソードは、テ

マも似ている上、構成が非常に似ている。孔子の一行が旅の途中、野に働く隠者に会う。弟子の一人が命を受けてそれと問答を交す。アンチ孔子的満足の境にいる老人。弟子の報告をきいてオブジェクションをさしはさむ孔子。この「長沮桀溺：」が「鳳兮鳳兮：」にすぐ続いていることからみても、谷崎がこれからヒントを得て「麒麟」の一部を書いたことはほぼ確かであろうが、私が問題とするのは、この漢文と「麒麟」との一致しない部分について、則ち、隠者と孔子の弟子子貢との対話の部分なのである。この部分は、全く作者のイマジナシオンで作られた純然たるフィクションなのだろうか。ところが、アナトール・フランス作「タイス」を読むと、これによく似た部分がある。舞姫タイスを汚れた世界から救い出そうと、アレクサンドリアに向って旅を続けるアンチノエの僧パフニウスは、その十八日目に、人里はなれたナイルのほとりに一軒の小屋を見つけ、そこに住む隠者と永遠について語り合いたいと思う。ところがその老人はイエスを知らない。そして、この幸福な虚心の状態から自分をひき出さずにいってもらいたい、といってパフニウスに別れるのである。谷崎の読んだと思われる前述のロオタス・ライブラリイ版の「タイス」でも、この部分はかなり長く、十ページにわたるが、そのうち重要な部分だけ、ぬき出して訳出してみよう。

……その男は裸だった。髪も髯もすっかり白く、身体は深い赤色をしていた。パフニウスはこの男を隠者に違くないと思ひ込んでいたので、修道士たちのいつも交し合うことばで挨拶した。

「兄弟よ、あなたと偕に平安のあらんことを、いつの日にか天國の妙なる樂しみを味わわれんことを。」

男は答えなかった。動かさず、何も聞かない風をしていた。パフニウスは、この沈黙は聖者たちがよく味わうあの恍惚境のためなのだろうと思った。そこで彼は未知の男の傍に手を組み、日没まで祈りを捧げていた。それから、隣りの男が少しも動かなかったのを見て、こう話しかけた。

「神父よ、もしあなたが沈んでいらっしゃる恍惚の境から醒められたなら、我等が主、イエス・キリストの御名によって私を祝福して下さい。」

すると男は、首を向けもせずにごう答えた。

「旅のお方、私にはあなたのおっしゃることも、その主、イエス・キリストというのもわかりません。」

「何ですと！」とパフニユスは叫んだ。

「予言者たちは彼を予言し、無数の殉教者たちはその御名を明らさまにいい、皇帝さえ彼をほめたたえております。そしてつい先程、私はシルシレのスフィンクスに彼の榮光を宣べさせました。あなたが彼を御存知ないということがありますか。」

「それはあり得ることです。もしこの世に何か確かなことがあるとすれば、確かなことでさえありません。」と男は答えた。

パフニユスはこの男の信じられぬ程の無智に驚き、且つ悲しくなった。

「もしあなたがイエス・キリストを御存知ないなら、あなたをしていられることは何の役にも立たないし、あなたは永遠の生を得ることも出来ないのですよ。」といった。

老人は答えた。

「行動するということも、行動しないということも、徒らなことです。生も死も私には同じことなのです。」

「何ですって！ あなたは永遠に生きたいとは願わないのですか。でもあなたはこの砂漠の中の小屋に、隠者たちのようにして住んでいられるではありませんか。」とパフニユスはきいた。

「その様でもある。」

「あなたは裸で、すべてを棄てていられるのではありませんか。」

「その様でもある。」

「あなたは草の根を食べて生き、清廉な生活を送っていられるではありませんか。」

「その様でもある。」

「あなたはこの世のすべての虚栄を捨てられたのではありませんか。」

「実際、私は、普通、人の憂となるような空しいものは棄てたのだ。」

「それではあなたは、私と同じように、貧しく、清廉で、世捨人でいらっしゃる。それなのにあなたは、私のように神の愛と天上の幸福を望んではいられない。もしあなたがイエス・キリストを信じていられないのならば、なぜ有徳でいられるのですか。もし天の寶物を願っていられないのなら、なぜこの世の寶物を棄てられたのですか。」

「旅のお方、私は何も棄てたものではありません。そして、十分に満足して生きる方法を見つけ出したと自慢しているのです。正確に言えば、善い生活というものも、悪い生活というものもないのです。本來、それ自体では、敬すべきも恥ずべきも、正しきも正しからぬも、快きも苦しきも、善きも悪しきもないのです。物事に性質の評價を与えるのは意見なのです。丁度、塩が食物に味をつけるように。」⁽³²⁾

(五ページ略。老人はパフニユスの問に答えて、自分は懷疑主義者であると認め、その思想に至って世を捨ててまでの俗界での半生を物語る。名はチモクレスという。)

パフニユスは注意深く老人の物語をきいてこう云った。

「コスのチモクレスよ。あなたのお話には少しも意味のないところはありません。例えば、この世の富を輕んずるのは賢いことです。しかし、それと同じように、永遠を輕んじ、神の怒の中に身をおくとは狂気の沙汰です。チモクレスよ、私はあなたの無智を悲しみます。あなたが三位一体の神が実在することを知り、子が父に従うごとくこの父に従うよう、私はあなたを眞理へ導こうと思えます。」

しかしチモクレスは彼をさえぎった。

「旅のお方、あなたの主義を講釋するのは止めて下さい。そして私に自分の意見を頷とうとして下さるな。どんな議論も無益です。私の意見は、意見を持たぬということなのです。私は好みなしに生きることで、悩みから離れて生きているのです。道をお急ぎなさい。そして、私がつらい苦業の生涯の果に、快い湯に入っているよ

うにひたり込んでいるこの幸福な無關心の状態から、私をひき出そうとしないで下さい。⁽³³⁾」

この一節には、アナトール・フランスのさまざまな面があらわれている。キリストを知らずに満足している一人の老人を描くことよってのキリスト教批判、また、生きることも死ぬことも同じであり、本来的には善も悪も無いのだという相対的な老え方は、彼の思想の断片をあつめた「エピキュールの園」の中でも語られ、この世の中には何一つ確実なものはないというセプティシスムにまで深まる。キリストを知らない老人は、そのまま幸福な状態にあるといい、神を知らせようとするパフニウスをことわるが、「麒麟」の老人も同じように、「幼い時に行を勤めず、長じて時を競わず、老いて妻子もなく、漸く死期が近づいて」いて満足している。世間の人が憂としていることをこの老人は楽しみとしているのだ。「死と生とは、一度往つて一度反るのぢや。此處で死ぬのは、彼處で生れるのぢや」と答えて子貢にとりあわないこの老人の姿は、“I have renounced those vain things which are usually men's care” また、“life or death is indifferent to me” と答える「タイス」の隠者を思わせる。谷崎の描いた隠者にはっきりと認められるアナトール・フランス式の *relativisme* からも、「麒麟」のこの部分は、「タイス」のみごとな東洋的書き換えではないかと思われてならない。

三

以上、「麒麟」執筆のため、漢典以外に役立ったと思われるものとして、アナトール・フランスの「バルタザアル」と「タイス」とを挙げたが、谷崎は一体この二つの作品を読んでいただろうか。

前述した如く、「タイス」の英訳、ロオタス・ライブラリイ版は明治四十一年十一月に、「バルタザアル」の英訳、ジョン・レイン版は四十二年暮頃に日本に移入されたと推定されるが、「麒麟」の発表された「新思潮」は、明

治四十三年十二月号である。そして、その頃の谷崎がアナトール・フランスを盛んに読んでいたことは、「麒麟」発表の翌月、明治四十四年一月号の「新思潮」の編集後記、「消息」欄の次のような記事からも知れる。

○二月には翻譯號を出す。ここで一寸誰れが何をやるかを見ると、先づ谷崎がアナトール・フランス、後藤がアンリ・ド・レニエの小説、和辻はダヌンチオの脚本、木村はユイスマンスのカテドラルの一節か何か。小泉のニイチエは動かない處だ。大貫は大いにぢみにモオパッサンかつルゲエネフを譯すだらう。小山内氏はシュニッツラアを譯して呉れる。³⁴⁾

トップに書いてあることから、谷崎がフランスを大いに読んでいたことは十分推察されるし、その頃までに入つた英訳本で谷崎好みといえ、まずこの二篇である。しかし、この予告にもかかわらず、谷崎は次号の「新思潮」に翻訳は出さず、代りに「彷徨」を發表しているから、アナトール・フランスの作品のうちの具体的な書名はやはり推定の域を出ない。ところが、ここでもう一つ注意しなければならないことは、特に初期の谷崎に顕著な、「歴史物」への関心と、反自然主義の態度とである。

第二次「新思潮」第一号に彼が發表したものは、「史劇」と銘打った一幕物「誕生」であった。そして、「麒麟」発表の前号の「新思潮」三号（明治四十三年十一月）所載の「REAL CONVERSATION」中で、彼は、「然し僕のやつてゐる事は決して古かない積りだ。ロダンの彫刻を見ると實に自由だ。神話も材料にすれば現代人の肖像もやる。そしていろいろな形式で、實に自由に表はすだけの事を表はしてゐる。僕は文學で以てあれがやりたいんだ。」³⁵⁾と抱負を語っている。また、それから二十年以上後になって、彼はこう回顧している。

私は「新思潮」をやり出した時代から歴史の教養はなかつたけれども、興味だけは感じてゐたので、當時ひそかに直木君と同じやうな憂ひを抱き、同人の誰彼にその不平を洩らしたことも一再ではなかつた。私は歴史物を

以て文學の正統だと主張する譯ではないが、作家も批評家も一向その方へ注意を拂はず、日常身邊の些事のみ描いて、それを兎や角と論議してゐる文壇が、いかにも限界が狭少で、びっこの發達をしつつあるやうに思はれてならなかった。現代を正視する文學も勿論必要ではあるけれども、過去を再現する文學も決して等閑に附すべきではない。フローベルやアナトール・フランスに傾倒する者が、サラムボーやタイスの價値を認めない筈はないとしたら、われわれの國にもあゝ云ふ偉大な歴史小説が欲しいではないか。³⁶⁾

ここで、谷崎における「歴史小説」のイデーが如何なるものであつたかが問題となる。第一に注目されるのは、彼の歴史物への関心が、反自然主義の姿勢と極めて密接につながり合つてゐるという事實である。「作家も批評家も一向その方へ注意を払はず、日常身邊の些事のみ描いて」ゐる、「限界が狭少で、びっこの發達をしつつあるように思はれる自然主義横行の文壇に対する反抗、そこからの脱出への道として、彼は歴史小説を求めている。第二は、彼のいう歴史小説とは、あくまでも「現代を正視する文學」のアンチ・テーゼとしてとらえられた、「過去を再現する文學」なのだという事實である。この点で、彼の意圖したものは、過去を語りつつも多かれ少なかれ現代を諷しているアナトール・フランスの歴史小説とは大きく喰いちがってくる。では、谷崎以前の歴史小説とはどんなものだったのであるうか。

明治三十五年、上田敏の解釈したところによれば、

歴史小説の衰凋は歴史其物の研鑽日々に精緻なるに起因す。吾等は餘りに史眼を有す、餘りに史的發展の逕路を知れり。この醒覺せる民衆を誑きて、過去の時代を復活し、其空氣と色彩とを新にせむこと、新思潮の回瀾あるにあらざるば、到底望むべからざるなり。……

今や轉移の機其裡將來の英才は養はれ未發の思潮漸く熟せむとす。……故に暫らくスコットを誦し、マンゾオニを讀み、痛心の現代より心神を放ちてデュウマが残したる不朽の物語を楽しまんかな。³⁷⁾

ということになり、歴史小説は、谷崎の場合より更に積極的に、むしろ現代を忘れるために過去を再現する文学としてしか考えられていない。これをおしすすめていくと、明治四十二年二月「新小説」所載、竹越與三郎談の、現代に満足し未来に夢をもっている国民は歴史小説を要求せず、故に将来歴史小説の発展は望めまいという極めて悲観的な結論に至る。その上、竹越説によれば、日本人のように自国の歴史知識のない国民にとっては歴史小説は存在することと難く、またヨーロッパで飽かれてしまった歴史小説は、ヨーロッパの影響を脱することのない今の日本文壇では受け入れられないというのである。³⁸ 前述の上田敏にあてた鷗外書簡は、「……例えば Anat. France のやうな作でも出たら一應大陳腐として斥けらるゝでせう。」のあとは、「それも歴史の研究といへば澁柿派の外にない時代ならば是非もありませんまい……」と続いている。「澁柿派」とは、当時東京日々新聞にあつて講談的な歴史小説を書いて読者の歓迎をうけていた塚原澁柿園を指す。ここではすでに非文学的な「澁柿派」の講談的歴史小説を不満とし、それに対立するものとしてアナトール・フランスの作品を考えていた鷗外の姿がみとめられ、この点におけるアナトール・フランスの評価は谷崎の場合につながる。鷗外の歴史小説といわれる一群の作品は、大正元年の「興津弥五右門の遺書」にはじまるので、その四年前、明治四十一年のこのことばは注目されてよい。

明治四十三年末に現れた「麒麟」以前の歴史小説、それは早く明治二十年代からの長い文学生活を保ち続けた塚原澁柿園に代表される。しかし谷崎の「麒麟」は、ただ当時隆盛であつた自然派の小説と趣を異にしていたばかりか、歴史小説としては、明治二十、三十年代を風靡した澁柿園、浪六らの作品とは全く質を異にするものであつた。それは明治のこうした歴史小説と絶縁するものであると同時に、はっきりと大正期の鷗外、芥川につながつて行く。さきへのべたように、谷崎は、「過去を再現する文学」を求めた。それは彼が、現代を描くことによつて存在理由を主張する自然派の文学に対抗するものとして撰んだ文学形式であつたといえる。そして今度はその存在理由であつた作品の芸術的完成度という点で、彼は見事な成功を収めたのである。鷗外は、「わたくしは史料を調べて見て、其中に窺はれる『自然』を尊重する念を發した。そしてそれを猥に変更するのが厭になつた」（「歴史其儘と歴史離れ」といっ

て、遂には大河歴史小説ともいふべき傑作、「伊沢蘭軒」を生んだが、同時に、その「知らず識らず歴史に縛られた」ことから脱しようとして、「山椒大夫」を書いた。しかし、この「歴史其儘」の立場にせよ、「歴史離れ」の立場にせよ、鷗外がすでに明治二十二年、ゴットシャルに抛って草した「小説論」に明瞭にあらわれている、文学は芸術であり、それは美しいものなのだ、という命題からはなれてはいない。一方、芥川は、アナトール・フランスの歴史短篇、「ユダヤの代官」にあらわれたピラトに興味を覚えはしたが（「澄江堂雜記」九、歴史小説）、彼にとっての歴史小説は、むしろテエマを力強く表現するために必要な「異常な事件」を自然に見せるための方便なのであって、「昔」の再現を目的にしているのではない（「澄江堂雜記」三十一、昔）。ここで、谷崎は「過去を再現する文学」といっているのだから一見異っているようにも見えるが、実は芥川は、「僕は小さくとも完成品を作りたいと思っている」（「校正後に」）と、作品の芸術的完成を強く志向した作家である。彼はそのためにもこそ、短篇形式をも選び、また「昔」をも舞台にとったのであるから、その意図した方向において、全く谷崎と同一であったといつてよからう。こうした鷗外や芥川にみられる歴史小説のイデーの諸相、これはさきに竹越與三郎によって否定された歴史小説とは別の、谷崎において自然主義から脱出するための突破口として求められた歴史小説が、更に発展した姿と考えてよいのではないだろうか。そして、日本の講談的歴史小説から文学的歴史小説への転換、模索期にアナトール・フランスが姿をあらわすことは極めて興味深い。

以上みた如く、谷崎が「偉大な歴史小説」と称賛した「タイス」が、「当時世間に流行して居る自然主義の小説とは、全く傾向を異にして居た」（「異端者の悲しみ」）小説を生み出す一つの力となっていたことは否定できない。更に勝手な想像をめぐらせば、「タイス」のモチーフが変型されて、後の「無明と愛染」（大正十三年）のモチーフとなったのではないかとも思われる。昔、遊女愛染の色香に迷った高野の上人が、愛染と再会するという設定は、アンチノエの僧正パフニウスと、アレクサンドリアの遊女タイスを想わせる。しかし、愛染は聖タイスとはならないし、高野の上人はまたパフニウスではない。徐々に外国作家の影響を脱して行ったこの作家に、あとあとまでのアナトール・フランスの影を求めめることは、危険でもあろうし、無意味でもある。ただ、私に推定されることは、初期の谷崎

はアナトール・フランスをよく読んでいたし、それはたしかに、作品を生むための一つの力となり得たのであって、それが珍しく顕著に現われた作品が、「麒麟」ではあるまいか、ということである。しかしそれは、巧みに漢典のかけにかくされた上、全く谷崎流に読まれたアナトール・フランスであった。——「女性の美」が絶対的な悪魔力を發揮して勝利者となり、男はその前に拜跪していささかも悔いない——すでに「刺青」からあらわれて、一生この作家のものであったこの全く谷崎的なテーマは、靈公夫人南子を象徴として、「麒麟」をも例外としない。アナトール・フランスのえがいたシバの女王バルキスのみならず、オスカー・ワイルドのサロメのおもかげも彼女のうちには見出される。バルキスからはなれてひとり塔にこもり天文学に熱中するバルタザアルの姿に、結婚生活に幻滅し、そこからの逃避を試みる作者アナトール・フランスその人を認める論者もあるほどだが、谷崎においては女性への幻滅はない。彼にあっては、女性に常に勝利者なのである。

永井荷風は夙にこの作品にアナトール・フランスを感じ、また、佐藤春夫も、「谷崎の『麒麟』その他にはその文体や手法のアナトール・フランスから来たものを思はせるものがあった」こと、「谷崎が眞向からアナトール・フランス張りを見せた」⁽³⁹⁾ことを指摘している。敢えてこれを炯眼というならば、この炯眼は、自分自身アナトール・フランスをよく読んだこの二人の作家にして、はじめて可能なものだったのであるまいか。

【補 註】

- (1) 明治二十九年九月「帝国文学」第二卷第九号「批評家の任務」(訳)、明治三十年六月「帝国文学」雑報欄「翰林院の二新学士」、明治三十年八月「帝国文学」「仏蘭西文学の研究」、明治三十二年四月「帝国文学」海外騒壇欄「仏文近著」、明治三十九年十月、十一月「新小説」「滑稽趣味」、明治四十年十一月「中央公論」「近代の小説」、明治四十
- (2) 一年一月「明星」「詩話」など。
「歌舞伎」明治四十一年五月、九二頁。上田敏全集補巻五三九頁所収。なお、上田敏全集補巻三九三頁所収の二月十五日付の夫人悦子宛書簡も同様の内容である。
- (3) Mother of Pearl. Translated by F. Chapman, 1908;
The Garden of Epicurus. Translated by A. Allinson, 1908; The Red Lily. Translated by W. Stephens, 1908;

The Crime of Sylvestre Bonnard. Translated by L. Hearn. どれも発行所は London, John Lane the Bodley Head Limited.

- (4) "The Mother of Pearl" (L'Etui de Nacre) 中の九篇と "The Garden of Epicurus" (Le Jardin d'Epicure) と所収の "In the Elysian Fields" (Aux Champs-Elysées) を訳したもの。

- (5) 森鷗外全集著作篇第三十三卷三〇四頁。
(6) 大正四年警醒社刊。

- (7) 「アカ子」明治四十二年五月号、五九頁。

- (8) 「新小説」明治四十二年四月号、三一六―三一七頁。

- (9) 前掲書三一七―三一八頁。

- (10) 姉崎嘲風、笹川臨風は大正五―八年に樗牛会機関誌「人文」を畔柳芥舟と共に発行しているし、野の人斎藤信策は樗牛の実弟、小山鼎浦もこの親友であった。

- (11) 「文章世界」明治四十二年五月「寄贈された雑誌」欄。筆者は花袋でなければ木城前田晃であろうか。

- (12) 「東京の三十年」(角川文庫)一九〇頁。

- (13) 「リネージー夫人」明治四十二年三月、読売新聞。

- (14) 「青春物語」(角川文庫)五二頁。

- (15) 「タイヌ解題」(国民文庫刊行会「椿姫・タイヌ」昭和二)四頁。

- (16) 「三田文学」明治四十四年十一月号、一四八頁。

- (17) 「青春物語」所収、「紅葉館の新年会のこと」(角川文庫三五―三八頁)参照。なお「敏先生のおもひで」(全集第十二巻所収)その他にもこの感激は語られている。

- (18) 「三田文学」明治四十四年十一月号、一五〇頁。

- (19) 「谷崎文学」(昭和二五、朝日新聞社)一〇二―一〇三頁。

- (20) 前掲書一〇三―一〇六頁。

- (21) 「三田文学」明治四十四年十一月号、一五一頁。

- (22) 谷崎潤一郎全集(中央公論社、新書版)第一巻、一五頁。

- (23) 谷崎が読んだであろう英訳本から訳出すべきであるが、テキストがみつからなかったため仏語から訳出した。

BALTHASAR

Magos reges fere habuit Oriens.

TERTULL.

En ce temps-là, Balthasar, que les Grecs ont nommé Saracin, régnait en Ethiopie. Il était noir, mais beau de visage. Il avait l'esprit simple et le cœur généreux. La troisième année de son règne, qui était la vingt-deuxième de son âge, il alla rendre visite à Balkis, reine de Saba. Le mage Sembobitis et l'eunuque Menkéra l'accompagnaient. Il était suivi de soixante-quinze chameaux, portant du cinnamome, de la myrrhe, de la poudre, d'or et des dents d'éléphant. Pendant qu'ils cheminaient, Sembobitis lui enseignait tant l'in-

fluence des planètes que les vertus des pierres, et Menkéra lui chantait des chansons liturgiques; mais il ne les écoutait pas et il s'amusait à voir les petits chacals assis sur leur derrière, les oreilles droites, à l'horizon des sables. (Balthazar, Chap. I, pp. 3-4.)

(24) 谷崎潤一郎全集第一巻、二七一—二八頁。

(25) Et, entrant dans la maison, ils trouvèrent l'enfant avec Marie, sa mère, et, se prosternant, ils l'adorèrent. Et, ouvrant leurs trésors, ils lui offrirent de l'or, de l'encens et de la myrrhe, ainsi qu'il est dit dans l'Evangile. (Balthazar, Chap. V, p. 30)

(26) 「谷崎文学」一〇五頁。

(27) 中村光夫氏がこの結びを評して、「結びの一句などもほとんど芥川に近いアイロニーを感じさせます」(「谷崎潤一郎論」七八頁)といっているのは、芥川におけるアナトール・フランス的なものを芥川本来のものとしている一種の本末転倒がみられるように思われる。これは芥川的なものとしてとらえられるより先にアナトール・フランス的なものとしてとらえるべきものではないだろうか。

(28) 「論語」、「史記」中で「麒麟」創作の材源となったと思われるものをぬき出して掲げる。

○子曰。吾末見好徳如好色者。

(「論語」子罕篇。同じく衛靈公篇にも同様の記述あり。)

○楚狂接輿。歌而過孔子曰。鳳兮鳳兮。

何徳之衰。往者不可諫。來者猶可追。已而已而。今之從政者殆而。孔子下。欲與之言。趨而辟之。不得與之言。

(「論語」微子篇。「史記」孔子世家篇にも同様の記述あり。)

○他日靈公問兵陣。孔子曰。俎豆之事。

則嘗聞之。軍旅之事。未之學也。明日與孔子語。見蜚鷹。仰視之。色不在孔子。孔子遂行。復如陳。夏。衛靈公卒。

(「史記」孔子世家篇。「論語」衛靈公篇にももう少し簡単な同様の記述がある。)

○月餘反乎衛。主遽伯玉家。靈公夫人

有南子者。使三人謂孔子曰。四方之君子不辱欲下與寡君爲中兄弟者。必見寡小君。寡小君願見。孔子辭謝。不得已而見之。夫人在絺帷中。孔子入門。北面稽首。夫人自帷中再拜。環珮玉聲璆然。孔子曰。吾鄉爲弗見。見之禮答焉。子路不說。孔子矢之曰。予所不者。天厭之。天厭之。居衛月餘。靈公與夫人同車。宦者雍渠參乘出。使孔子爲次乘。

招搖^二市^一過^レ之。孔子曰。吾未^レ見^三好^レ德^一如^レ好^レ色者^一也。於^レ是醜^レ之。去^レ衛過^レ曹。

(「史記」孔子世家篇。「論語」雍也篇にもごく一部分だけ同様の記述がある。)

○孔子適^レ鄭。與^二弟子^一相失。孔子獨立^三郭東門^一。鄭人或^レ謂^二子貢^一。曰。東門有^レ人。其類堯。其項類^二臯陶^一。其肩類^二子産^一。然自^レ要以下。不^レ及^レ禹三寸。纍纍若^二喪家之狗^一。

(「史記」孔子世家篇。)

○子言^二衛靈公之無道^一也。康子曰。夫如^レ是奚而不^レ喪。孔子曰。仲叔圍治^二賓客^一。祝鮀治^二宗廟^一。王孫賈治^二軍旅^一。夫如^レ是奚其喪。

(「論語」憲問篇。)

(29) — Seigneur, on dit que vous aimez la reine Candas, votre voisine. Ne me trompez pas: est-elle plus belle que moi? (Balhasar, Chap. I, p. 7)

(30) けれども、ここで南子夫人がバルキスの姿をかりてつくり出されたと仮定してみると、谷崎の読んだアナトール・フランスは実際よりはるかに官能的、耽美的に、いわばワイルド的に読まれていることに注意したい。この南子夫人はバルキスであると同時にサロメを思わせる。次にのべる「タイス」と「バルタザアル」とは、この意味からいってもアラ

ンスの作品中最も谷崎好みのものだったのではなからうか。この二つの作品の英訳本移入の時期、谷崎自身の文学生活の時期、その二つの結合が「麒麟」を生んだと私は考えた。

(31) 谷崎潤一郎全集第一巻一五—一七頁。

(32) ... The man was naked; his hair and beard were entirely white, and his body was of a deep red colour. Paphnutius had no doubt that he was the hermit, and saluted him with the monks' usual greeting:

"Peace be with you, brother! may you one day taste the sweet joys of Paradise."

The man did not reply, but remained motionless and appeared not to hear. Paphnutius imagined that his silence was caused by one of those transports saints often enjoy. He knelt with clasped hands by the unknown's side and remained thus in prayer till sunset. Then, seeing his companion had not moved, he said to him:

"Father, if you have recovered from the transport in which I have seen you, give me your benediction in our Lord Jesus Christ!"

The other replied, without turning his head:

"Stranger, I know not what you mean, nor this Lord Jesus Christ."

"What!" cried Paphnutius. "The prophets have foretold him; legions of martyrs have confessed his name; Caesar himself has adored him, and but a short

time ago I had his glory proclaimed by the Sphinx of Sile. Is it possible that you know him not?" "Friend," replied the other, "it is possible. It would even be certain were there any certainty in the world."

Paphnutius was surprised and grieved at this man's incredible ignorance.

"If you know not Jesus Christ," he said to him, "your works will avail you nothing, and you will not gain eternal life."

The old man replied:

"It is vain to act or to refrain: life or death is indifferent to me."

"What!" asked Paphnutius, "you do not desire to live eternally? But, are you not dwelling in this desert in a hut after the manner of the Anchorites?"

"It would appear so."

"Are you not naked and deprived of everything?"

"It would appear so."

"Do you not live on roots and practise chastity?"

"It would appear so."

"Have you not renounced all the vanities of this world?"

"In truth, I have renounced those vain things which are usually men's care."

"So you are as I am, poor, chaste, and a hermit. But you are not as I am in the love of God and in the sight of celestial felicity. Why are you virtuous

if you do not believe in Jesus Christ? Why do you deprive yourself of this world's treasure if you do not hope for treasure in heaven?"

"Stranger, I deprive myself of nothing, and I flatter myself that I have found a manner of life satisfying enough, though, to be exact, it is neither a good nor a bad life. Nothing is in itself honourable or shameful, just or unjust, agreeable or painful, good or bad. It is opinion which gives things qualities, as salt savours meats." *(Thais, I, pp. 23-25)*

Paphnutius had listened to the old man's story with attention.

"Timocles of Cos", he replied, "I confess that everything in your purpose is not without sense. It is wise, for instance, to despise this world's goods; but it would be madness to despise the eternal, and to expose one's self to God's anger in the same way. I deplore your ignorance, Timocles, and I will instruct you in the truth, so that knowing that a God exists in three hypostases you may obey this God as a son obeys his father."

But Timocles interrupted him:

"Restrain yourself, stranger, from expounding your doctrines, and do not attempt to constrain me to share your opinions. All discussion is sterile. My opinion is to have no opinion. I live exempt from troubles, provided that I live without preferences. Resume your way, and do not attempt to draw me

from the blessed apathy in which I am plunged, as
in a delicious bath, after the rough toil of my life.”

(*Ibid.*, pp. 30-31)

- (34) 「新思潮」(第二次)明治四十四年一月号九七頁。
- (35) 「新思潮」明治四十三年十一月号七〇頁。
- (36) 「直木君の歴史小説について」(昭和八年十一月—九年一月に「文芸春秋」に発表)、全集二十二卷九一—九二頁。
- (37) 上田敏「歴史小説」(明治三十五年三月文友館刊「最近海外文学統篇」)全集第三卷八五—八五三頁。
- (38) 「新小説」明治四十二年二月号。二月号。二四五—二四七頁。「歴史小説の将来」
- (39) 佐藤春夫「わが龍之介像」一五五頁。

Résumé

Les débuts littéraires de TANIZAKI Jun-ichirô et l'influence d'Anatole France

— A propos de *Kirin* —

Maki Shinotsuka

Une nouvelle historique de TANIZAKI, *Kirin*, parue dans la revue *Shinshichô* (2^e série, 1910) marqua les débuts littéraires de ce jeune auteur qui furent d'autant plus heureux que cette œuvre reçut les éloges de NAGAI Kafû.

Dans cette nouvelle écrite d'après deux classiques chinois, le *Louen-yu*, Entretien de Confucius avec ses disciples et le *She-ki*, Mémoires historiques de Sse-ma Ts'ien, nous trouvons aussi l'influence de deux ouvrages d'Anatole France, *Balthasar* et *Thaïs*, qui venaient d'être introduits au Japon par l'intermédiaire de traductions anglaises.

Le jeune TANIZAKI étaient l'un de ces lecteurs d'Anatole France qui, mécontents du courant naturaliste japonais, alors florissant, cherchaient une voie nouvelle.

Pour TANIZAKI, "le roman historique" était "la littérature qui reproduit le passé" à l'opposé de "la littérature de la vie quotidienne" prônée par l'école naturaliste.

Après le succès de *Kirin*, le roman historique qui n'était jusqu'alors qu'un genre plutôt mineur se développera à l'époque de Taishô, avec deux grands auteurs, MORI Ogaï et AKUTAGAWA Ryûnosuke.